特別支援教育研究論文集

―令和６年度 特別支援教育研究助成事業―

中学校における発達に課題のある生徒の
進路先の意思決定を促す取り組み・支援についての研究

―特別支援教育コーディネーターができる「人を繋ぐ」から「将来に繋ぐ」支援―

筑紫野市立二日市中学校

研究代表　教諭　村上　郁子

令和7年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

要旨

福岡県では、特別支援教育推進プラン（第２期）にて、５つの柱を設定し、就学前における支援の充実を目指している。発達に課題のある生徒が将来的に自立し社会参加するためには、卒業後の生活を見据えたキャリア教育や職業教育の充実が必要である。また、自己肯定感を高めたり、生徒本人の自己選択・自己決定を尊重したりする機会を確保するなど早期からのキャリア教育を踏まえた進路指導のさらなる充実が必要であると示している。

本研究では、筑紫地区の特別支援学級在籍生徒が高等学校に進学する状況から、進路指導の在り方や方法を検証し、改善点を見つけながら、生徒の進路を支援してきた。しかし、進路に関わる課題が多岐に渡ることや個々にあった進路指導を提供できているのかという課題が見えてきた。また、将来の見通しや目標を見出せる方法、生徒が自分のことを客観的に知り、強みをいかした将来設計ができる生徒の育成を目標に、中学校３年間でできる支援方法を見出すことを目的に行った。

ここ５カ年の進学状況を見ると、特別支援学級から高等学校への進学は年々増加し、進学先も多様化している。３年ほど前までは、通信制・サポート校への進学が増えていたが、福岡県では公立高等学校の特色化選抜という入試制度が導入されたこともあり、生徒・保護者ともに全日制の高校進学希望者が増加している。また、特別支援学校への進学は少し減少傾向にあり、就労や自立を目標においた教育課程の学校の選択をせず、全日制やサポート校・通信制などの高等学校卒業を目標にしている生徒や保護者が多くなっている。

さらに、進路指導を進めるに当たって、進学後の進路や将来のことに見通しが持てず、高校への進学が目標になっている生徒が多いと感じる。特別支援学級担任は、生徒の将来や自立を見据えた進路指導を進めていきたいと考えているが、生徒自身が自分のことを客観的に捉え、決められることは自分で決め、自分の気持ちを表現し、高等学校を選択しているのかは不透明な部分が大きい。

このような状況から、自分の就労や自立を見据え、「進路実現」と「将来を支える力」として、中学校在学中に「自己理解」「自己決定」「言語化」を実行機能の視点から支援の手立てとし、将来を支える力をつけ中学校を卒業させたいと考えた。

中学校に入学し、学習や環境は目まぐるしく変化し、学校の生活環境についていくのが精いっぱいの生徒を見てきた。教師は生徒の状況に合わせた支援を行い、生徒と話をしながら様々な方針を立てる。うまくいくときもあれば、いかないときもあり、そのたびに生徒の心が揺れ、不適応を起こす生徒も少なくない。私たち教師は入学してから卒業するまでの３年間でどのような力をつけて生徒を送り出すことができるのかを模索してきた。支援をする側の教師は、「将来を見通す」「自己を理解する」「生徒の自立」を考え、３年後に進路選択ができる生徒の育成を目指し、日々取り組んでいる。

生徒を支援していく中で、大事にしていることは、生徒を「理解する」「お互いを知る」「落としどころをつける」である。対話をする中で、生徒を理解し、どのような支援が適しているのかを判断し、実践する。その日々の積み重ねが、生徒の「自己理解」「自己決定」「言語化」につながると考えている。

キーワード：意思決定　自己理解　自己決定　言語化